

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：33932

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720079

研究課題名（和文）江戸中期の俳諧における連句評点集の総合的研究

研究課題名（英文）COMPREHENSIVE RESEARCH ON THE COLLECTION OF LINKED VERSES WITH CRITICAL COMMENTS PERTAINING TO THE HAIKAI (SEVENTEEN - SYLLABLE VERSE) DURING MIDDLE OF EDO PERIOD

研究代表者

寺島 徹 (TERASHIMA TORU) 桜花学園大学

研究者番号：30410880

研究成果の概要（和文）：

中興期俳諧の連句評点について美濃派・伊勢風の資料を中心に調査・分析を行った。天理図書館所蔵の連句評点集にくわえ、名古屋市博物館蔵山口家文書の連句評点についても調査した。山口家文書の墨山宛暁台書簡には、連句評点が付帯されており、句ごとの判詞と書簡における連句作品への総評というレベルの異なる批評について分析することができた。また、評点の判詞と伝書の影響関係を調べるために、連歌伝書の諸本調査も行った。

研究成果の概要（英文）：

I have conducted the study and analysis on the collection of the linked verses with critical comments that were made during the middle of Edo period focusing on the Ise-style documents. In addition to the collection of the linked verses with critical comments owned by Tenri Central Library, I also studied the documents of Yamaguchi family owned by Nagoya City Museum. Since the Kyotai letters of Yamaguchi family are accompanied with the collection of the linked verses with critical comments, the analyses on these documents made it possible to analyze the linked verses of the period from various perspectives in terms of their styles. I also surveyed various books of traditional renga (poetic dialogue).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	9,000,000	270,000	1,170,000
2010年度	8,000,000	240,000	1,040,000
2011年度	8,000,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：中興期俳諧、連句評点集

1. 研究開始当初の背景

| (1) 連句の研究は、これまで芭蕉・蕪村な

どを中心とした「注釈」をのぞくと、東明雅らによる『連句辞典』（東京堂出版、1986）にはじまり、近年では、白石悌三・深沢真二ら「親句・疎句」の論による分析、堀切実・永田英理ら「七名八体」説による分析、宮脇真彦・満田達夫ら「式目・作法」（とくに月の定座）の観点による分析、東聖子ら「季語・季移り」の側面からの分析、池澤一郎ら「漢籍等の典拠」による分析などが主流であった。膨大かつ多様な発句研究とその方法論に比べれば、連句研究は質・量ともに充実したものとは言えない。

（2）このような連句分析の問題点は、作品分析の方法自体の難しさと、それに伴う先行研究の少なさにあるといえる。ただし、海外でもハルオシラネ「Traces of Dreams: Landscape, Cultural Memory, and the Poetry of Basho（邦題：芭蕉の風景 文化の記憶）」（Stanford University Press, c1998.）などに連句論についての言及もあり、国際的な関心も高くなっており、連句分析を進める必要性が求められている。

連句分析には、いわゆる狭義の意味での「俳論」が重視されてきた。「俳論書」における七名八体説など、狭義の俳論が用いられることが多く、本研究が目する「評点集」は、ほとんど言及されていない。本研究で「評点集」に着目したのも、新しい方法論により連句研究を進めようと企図したからに他ならない。

2. 研究の目的

（1）俳諧の連句評点は近世前期より存在し、主に点取俳諧における遊技の対象になってきた。これまで、芭蕉や蕉門のものが単発的に資料紹介されることはあっても、それが、連句研究史の中に、有機的に位置づけられることは少なかった。その遊戯性ゆえに、遡上にのぼることすら少なかったのである。しかし、研究代表者は、以前『暁台評 百歌仙』（名古屋市博物館蔵）を紹介・分析し、連句評点の判詞が連句の作品分析上に持つ有効性について、俳壇的な分析も鑑み、考察・報告した。本研究では、江戸中期における、1連句評点集の収集、2連句評点集の書誌調査、3連句評点の翻刻、4連句評点の分析、5連句評点のデータ化を目指そうとした。

（2）具体的な手順として、連句評点集の所在の追跡調査および書誌調査に重点をおき、資料整備を行うことを試みようとした。従来の作品分類（親句疎句・縁語・詞付など）と、評点におけるターム（俳諧術語）の抽出を行い、その相関性について分析し、この時代の連句の付筋の傾向について考察するための、新たな基礎資料を提供することを目的とす

る。

3. 研究の方法

（1）書誌調査を進めるため、予算に計上したデジタルカメラと外付ハードディスク等を利用して調査を行った。デジタルカメラで撮影を進め、マイクロフィルム（フィッシュ）化されているものは、現地調査で必要箇所を確認したあと、適宜、紙焼きを依頼し資料を収集した。関西方面では、天理大学図書館・財団法人柿衛文庫に赴き、フィールド調査を行った。天理図書館綿屋文庫蔵の伊勢資料である「逸漁俳諧資料集」の「1点巻集」を中心としたマイクロについて、書誌調査を行い、その過程でリストアップした資料数10点の紙焼き複写を行った。これらの資料をもとに、逸漁関係の評点のデータ化を遂行した。さらに、夏・秋を中心とした年5回程度の大阪・奈良・伊丹方面への出張調査を行った。また、関連資料を所蔵する早稲田大学図書館中村俊定文庫等への調査のため、東京方面へ年5回程度の出張調査を行った。このような文献の収集とともに、書誌作業の確認のすんだ文献については、随時翻刻作業、内容の分析を行った。

（2）また、評点資料の収集過程において、関連の連句資料についても、随時、収集・データ化の作業を行った。

（3）翻刻した資料のOCR作業、データ化、また付合資料のデータ化には、学生、修了生のアルバイトに作業を委託し、エクセル、アクセスへの入力を進めた。

4. 研究成果

（1）江戸中期における連句研究へのアプローチとして、従来ほとんど注目されてこなかった地方系蕉門における連句評点集をとりあげ、京都、近江、伊勢、尾張、美濃関係の俳人資料をもとに調査・分析することとした。連句評点をとりあげた理由は、「背景」でも述べたように、付合作法書などが機能しづらくなった江戸中期において、連句作品を分析する上で評語そのものが有効な視座になり得ると考えたからである。

このような問題意識のもと、初年度は、まず、連句評点集の所在地確認と探索、連句評点集の基本データの収集を行った上で、とくに「逸漁文庫俳諧資料集」（天理図書館綿屋文庫等所蔵）の「1点巻集」における連句評点を中心に、マイクロフィッシュ、原資料にわたり調査・分析を行った。この調査をもとに、伊勢俳人三浦樗良と、尾張俳人加藤暁

台・武藤白尼・武藤巴雀との評の違いについて「取成付」「浮世風」「三句のわたり」などの論を中心に分析してゆくための資料整備を行った。本研究の作業の流れとして連句評点集の書誌調査、評点の翻刻、評点の分析、評点のデータ化を企図しているが、初年度は、とりわけ伊勢の中興期俳人、三浦樗良による連句評点集の所在調査、および書誌調査（綿屋文庫、早稲田大学図書館中村俊定文庫、神宮文庫、藤園堂書店、柿衛文庫）に重点をおき、「三浦樗良の連句評点について」（蒼穹 99号）と題して、評点（綿屋文庫蔵）を翻刻し発表するなど翻刻、データ化につとめた。

（2）2年目も引き続き、江戸中期における連句研究へのアプローチとして、地方系蕉門における連句評点集をとりあげ、いわゆる美濃派、伊勢風系の俳人資料をもとに調査・分析をすすめた。連句評点集の所在地確認と探索、連句評点集の書誌情報と本文データの収集を行った上で、「逸漁文庫俳諧資料集」（天理図書館綿屋文庫等所蔵）および名古屋市蓬左文庫における連句評点を中心に、マイクロフィッシュ、原資料にわたり調査・分析を行った。この調査をもとに、尾張俳人加藤暁台・武藤白尼・武藤巴雀らの評の傾向と「三句のわたり」の解釈の違いなどについて分析した。

また、連句評点に関わるものとして、連句に関する作法書、伝書の調査にも着手した。とくに、1年目に科研費による調査で導入した、暁台伝の自筆系写本（桜花学園大学図書館蔵）の書誌的な分析を行った。この資料は、1『暁台判句合』2『白砂人集』『俳諧新々式』3『江戸二十歌仙（桃青門弟独吟二十歌仙）』の3点からなる暁台自筆系の写本である。とくに、暁台系『白砂人集』の性質を調べるため、許六系『白砂人集』の伝本調査を行い、版本『白砂人集』（暁台とその門弟の校訂による）の成立過程の解析について着手した。さらに、これらの伝書が連句作品や評点についてどのように関わり、どのように反映されているのかについて、校異を調べながら分析した。なお、2年目は、連句評点にかかわる資料として、暁台の句合資料についても調査を進め「暁台判の句合について」（桜花学園大学人文学部研究紀要 13）として発表した。

（3）3年目は、初年度、2年目にひきつづき、天理大学附属天理図書館、国立国会図書館、財団法人柿衛文庫、早稲田大学中央図書館、国文学研究資料館などで連句評点および俳諧資料について書誌的な調査をした。

これらに加え、名古屋市博物館の俳諧資料についても調査を行った。とくに、近年、名古屋市博物館に収蔵された山口家文書の書簡資料 13 点を調査し、付帯する連句評点に

についても調査分析した。山口家資料は、戦前の石田元季氏「暁台の書簡」（『俳文学考説』）において紹介されたもので、内容についてはすでに知られていたが、今回の収蔵品を調査することによって、真蹟の書体を確認することができた。山口家文書の暁台書簡は、安永前期から寛政期にかけてのものが多く、壮年から晩年の書体の推移についてうかがうことが可能となった。とくに、寛政初年と推定される墨山宛の暁台書簡には、連句評点 2 巻が付帯されており、句ごとの判詞と書簡における連句作品への総評というレベルの異なる評価を分析することができ、有意な資料といえる。同資料を分析することにより、「貞享風」「元禄風」などの風体と個別の作品の関係について探る糸口を見つけることができた。

また、評点の判詞と伝書の影響関係を調べるために、2年目から調査してきた『白砂人集』などの連歌伝書の分析を進めた。『俳諧新々式』『白砂人集』の諸本について、藤園堂文庫、相模女子大学附属図書館、財団法人柿衛文庫、天理大学附属天理図書館などで調査を行い、写本の系統と版本の流布状態について考察した。

以上の調査、分析の成果を「加藤暁台の書簡と連句評点について」（連歌俳諧研究 122号）、「日人稿「暮雨句集」について」（桜花学園大学人文学部研究紀要 14号）等にまとめ発表した。

（4）3年間の連句評点および周辺資料の調査によって、連句評点の翻刻、付随する連句関係資料の収集が進み、また、これらの資料集積により、中興期の地方系蕉門における連句の風体の移り変わりについて一部ではあるが分析することが可能になった。今後の課題として、評点と個別の作品についての関係性を分析しデータ化してゆく必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 寺島徹「加藤暁台の書簡と連句評点について」俳文学会連歌俳諧研究、査読有、122号、2012、pp51-63
- ② 寺島徹「日人編『暮雨句集』について」桜花学園大学人文学部研究紀要、査読無 14号、2012、pp1-17
- ③ 寺島徹「谷沢本『暁台発句集』について」(1) (2)、査読無、蒼穹 111号、(1) pp24-27 (2) pp26-30
- ④ 寺島徹「暁台判の句合について」桜花学園大学人文学部研究紀要、査読無、13号、

2011、pp13-21

- ⑤ 寺島徹「三浦栲良の連句評点について
(下)」、査読無、蒼穹 99 号、2009、p24-27

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺島 徹 (TERASHIMA TORU)
桜花学園大学・保育学部・准教授
研究者番号：30410880

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：